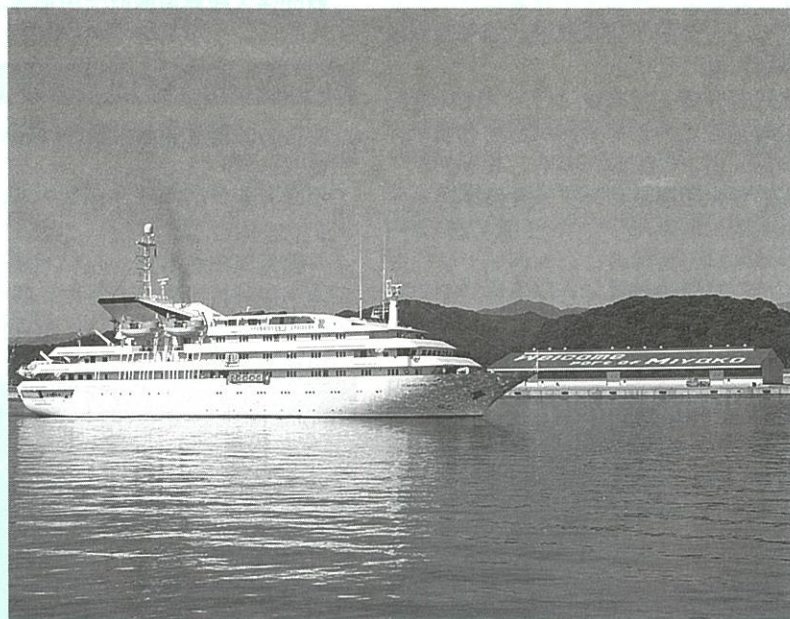


ようこそ宮古港へ ルネッサンスIV号

6月8日、イタリア船籍の世界周遊船「ルネッサンスIV号」(4,500トン)が宮古港に初入港した。同船は県がポートセールスの一貫として寄港を働きかけてきたもので、岩手の港にこれだけの規模の外国客船が入港するのは初めて。乗船客は、バスで北山崎、龍泉洞などを回り、北部陸中海岸の観光を堪能した。特に浄土ヶ浜では、地元小学校の児童による郷土芸能が披露され交流を深めた。

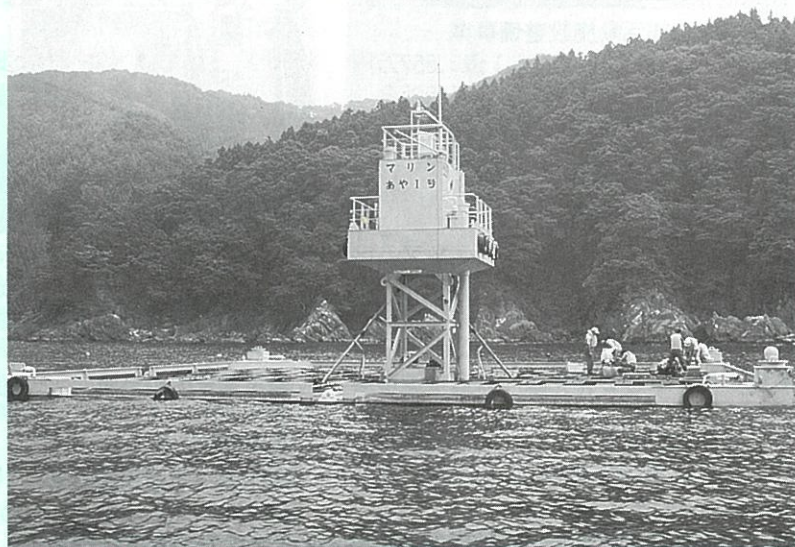
また世界アルペンボランティア通訳や国際交流員の協力もあり、観光地の説明などに活躍した。



▲宮古港に初入港する「ルネッサンスIV号」

「マリンあや1号」 海域実証試験開始

県と海洋科学技術センターが三陸町の綾里湾に設置した潜降浮上型人工海底「マリンあや1号」で、アワビとクロソイの養殖試験が始まり、6月18日、成長度合いを調べる初の計測が行われた。この人工海底は24立方メートルの鉄鋼製で、その下に養殖かご、いけすをつくる仕組み。ふだんは海中4メートルに沈めておくが、えさを与えるときなどはタンクの海水を排水し浮上させることができる。人工海底の実用試験はわが国初。海底地形が険しい三陸海岸の新たな増養殖手段として実用化が期待されている。



▲海面に浮上した人工海底。アワビとクロソイの第1回中間計測が行われた

古里岩手に就職を 「就職ガイダンス」

6月13日、「いわて就職ガイダンス」が盛岡駅前通りのホテルで開かれた。来春卒業予定の学生やUターン希望者に地元企業を紹介し、県内就職を働き掛けるため県が主催したもので、6月7日の東京、11日の仙台市に続き今年第3回目。

県内の大学、短大に通う学生や県出身の在京学生、社会人など、352人が参加。工藤知事のあいさつのもと、参加した45の企業担当者は業務内容や就職条件などをPRした。8月1日からは会社訪問解禁と就職戦線はいよいよ本格化する。



▲県内への就職を呼び掛け、あいさつする工藤知事

東北新幹線東京へ 新高速時代幕開け

6月20日、東北新幹線東京駅乗り入れが実現した。着工以来20年目の都心乗り入れであり、東海道・山陽新幹線と事実上直結。経済、文化などあらゆる面で東西交流の大動脈として期待が大きい。この日、盛岡駅では東京駅乗り入れのスーパーやまびこ1番列車「やまびこ12号」の出発セレモニーが行われた。工藤知事やJR盛岡支社長など関係者6人がテープカット。続いてミス三陸博、アルペンコンパニオンがくす玉を割り、やまびこ12号はさんき踊りの太鼓が響く中、盛岡駅を出発した。



▲東京駅乗り入れを祝いテープカット＝JR盛岡駅、20日午前7時49分

数字で見る岩手事情

第1号

10万匹

ふるさと食品の第1号に、やまぶどうを原料にした果汁100%のジュース「山のきぶどう」が決まった。ふるさと食品認証制度は、原材料・品質等に関する認証基準に適合する優良ふるさと食品を県が認証するもので、地方の優れた名産品を広く普及させるのがねらい。現在、認証の対象としている食品は、ぶどう天然果汁・りんご天然果汁・納豆・めん類の4品目。ふるさと食品に認められると商品に認証マークを表示することができる。



宮古市閉伊川河口で6月、サクラマスの子魚が放流され北の海へ旅立った。放流されたのは、県南部栽培漁業センター宮古分場で標識放流した約10万匹。サクラマスはサケ科の高級魚だが生態上不明な点が多い。このため放流にあたって回帰率などを調べるための標識を付け、そのうち1万匹の背びれのつけ根には「イワテ」の判を押した青いリボンも付けられた。県では、今後も定期的に放流を行うなど資源の増大を図っていく。

10年

3,660万人

「できる親切はみんなでしょう。それが社会の習慣となるように」をスローガンに「小さな親切」運動岩手県本部が結成されて今年で10年目。現在のスローガンは、「わが日本わが心をも美しく」。6月7日には「日本列島クリーン大作戦」と「日本列島コスモス作戦」を県内各地で展開。川や、駅前、道路などを清掃したり、コスモスの種とゴミ袋の入った袋を道行く人たちに手渡し、きれいな街づくりを呼びかけた。

昨年1年間に県内の観光地を訪れた人は、一昨年を127万人上回る3,660万人。過去最高を記録した。県商工労働部で統計をとり始めた昭和55年の観光客数を100とすると昨年の観光客数は168.4。冷夏の62、63年を除くと観光客数は毎年増加している。また、観光客が消費した金額も過去最高を記録した。観光客数が最も伸びたのは浄土ヶ浜、碓石海岸を抱える陸中海岸で、一昨年と比較し4.9%の増加となった。